古學先生和歌集　四

イ 13
907
44

古学先生和歌

門 1 13
號 907
巻 14

古學先生和歌集

伊藤維楨 著

大正十五年二月
花房仙次郎氏寄贈

春部

元日 己卯

[illegible]

年内立春 庚辰

[illegible]

立春閑

[illegible]

湖上朝霞

かすむ夜の月も跡なく湖や明行空にたなひく[illegible]

野径霞

春霞あさ野の原のゆくすゑも遠方人のかけはみゆ[illegible]

鶯

人しれぬ谷の戸出る鶯の声まちわひし春やきぬらむ

夢の歌よしまされ

まちわひし心も梅咲ハ香の色もしるく人もとひけり

故郷梅

ふるさとは梅の匂ひもしるくして昔やさらにしのふ月影

月前梅

月影もかすみのうちにかすれつゝ梅の花のみにほふ春の夜

家の梅花盛なりときゝて人のもとよりいひおこせける

月影もいとゝ梅の花に心を留めやらぬ[illegible]

夜梅

あやなしと闇にまかへる中にも梅の香はかくれさりけり

友達に小野の梅とて納采侍りしに包みて匂ひはたえもしける

首にて八千代と祝ふ[illegible]梅の花かな

ゝ移りきぬる人しのふとは梅のはなさへなかなかしきうらなき

簷梅

梅の花さかりなりける此世の遠くもあらし

あるしなき跡にさへ見ん宿しもまた花ちりしむかしの風

家ことに梅の咲けるをみて

咲初しころのはなのにほひはやかて梅のにほひくる哉

四月の比花の木の世外にありけるをみてよめる

大比叡や小比叡のこのあたりまて都の世々の藤原なれ

家々讀書

書よむやむかしの人の心の中まても梅咲く花八都にまされる

遠山似画圖

かけし絵を見るかたにうつしけやきさん家もしれはるかの遠山

春暁

ゆふ世さしてはあかし月霜に鐘の音ゆけはかの中途

江山春望

みわたせる入江の水のはるかに霞わたりて紅任の乃まち

懐の歌よみて人へ贈りける

山川よりもうさりきかへ時さへ思はしきかへし紀ことくしき

あるし人の外山の山荘に花みにまかりて
おもへともちることをしけにやよし外の山にあとゝむ
かをとめてたつねしもとにたちよれは花こそありけれいはぬいろかな

遠望山花

よし野山さくらの花をみるまては雲にやまかふ心つくしや

老人翫花 初めて老木の桜をみて

身はしらぬあはれもしらぬ老木の花をみるかなけふ
けイ

菴室の前の桜をよみて花しもさかりなりけるを
けれは

世の中をいとひてすめるおのつからこゝろのとかにのかれぬるかな

このあきの庭に桜木一株あり江戸桜といふ人は海棠の種なり桜
のたくひにもあらすといへり此海棠ありて海棠の詩を賦
御中やかましく草の文を為るとしらしむ大かた海棠とよみてけり
まくらうつしし棠陰居士か半残魂を桜陰とよみけり

家々翫花

こゝろをも柳さくらを植をきてまやかにてなるらむ

暮春

老ぬれはさしも惜みし春の海ならてなにかはかなしきもあはれ

二月の比人々伴ひて東山にまかりて花見侍りて

咲かゝる花の梢の程もなく帰るは今日のこゝろなりけれ

春の歌とてよみ侍りける

年ことにまたれし花もあかなくにちるをしも世のならひなりける

法眼某白梅の花をおくりけれは

志る人のしらぬにいつる梅の花ちりかゝる春のいのちなりけん

春の雨を

降りくるや雨にうるほふ花の色もけさ吹く風の山に見えけり

御室の花見にまかりて侍りけれは

これは山の花をおもしろく植置し鶯の声にきゝ侍りける

餘寒月

霞めるもさえかへりたる春の月影かくのみもかはるにかはらぬ

空の霞のたちかへりぬるを見て

けさみれは山路の桜咲にけりまたしき宿もなくも有けり

九條殿の庭の前花に和歌を読ませ侍りける

ちるをしも惜しむ心の花もなき右の庭の春の風

同日よめる歌

いろ香さへなき世の中の花も常にうつろふ色はなしやとそ見る

落花

たそかれの日に入あひのかねに落花をしらて人のなかめつらん

惜落花

来とをへて散る花の情をはあるまし人のこゝろつくさん

河上落花

しら波の河〻河内にちる花はおりし流て又かへるらん

落花

ちりぬるを惜みてもなほ桜花雪とあらしは吹ぬともあかし

霧中の落花

ゆふくれてへたつる嶺に花ちる山のこすゑのあけほのかな

名所落花

あさ明の月をはさそ朝ほらけよしのの里のちる花の雪（雲イ）

落花随風

春風にちるハ雪かとまかふらん香をとめてこそ花の陰さしかは

落花深處啼山鳥といふ句を題にて

世のうきをすてしころしもや雲の花をも山のおくにおなしかり

牡丹をうへて侍し人のもとへ

花をあけるはゆきくへ人の深さをしる人のこゝろまてへてやみるらん

丹杉

夕附日さす茶内芝生ま明かく見えつゝも見し夢の跡なり

款冬花

山吹の色にうつろふ影をみて清き流れもにほひけるその一入

梅薫風

ほのかにもまたき見えてにほひくる風の吹きくる梅の香

月前花

春の夜の月と花との一時をいかに惜しまむ庭の心は

庭前紅梅花咲きまさりて

紅のこぞめの梅をさかぬ人はいかにしれるか梅のいろをしらまし

紅梅は素質紅を帯ひ一種の奇なるものなるを賞歎し蘇東坡か

春宵一刻直千金といへる句をしも詠じて作りける

月もよし花もにほへる春の夜は一時をとるも千金の夜半

近江国水口といふ所にすみけるに翁もひそかにやとりける家の縁

に梅花のいとおもしろく咲けりけるを見て

垣根にはのこりし雪のあるまゝに花をもともに見るにぞありける

餘寒

春といへど雪も峯にも残れるを梅さくやどの月の寒けれ

伏見にて桃花をみてよみ侍る歌のなかに

ふるさとの桃の林のうつろひて雲にまかへるのこる花かな

歸雁

しらちなき雲のはたてにゆく雁もかすみにきえてたちかへるらん

吉田氏請によりて人にかはりて

梅の香を人のとひこぬ清らやむしろの宿にゆかしきは

吉田氏のもとにて題し

わかれゆくはるのなこりのをしまれてあかぬ心にのこる花かな

暮春待月落花下

うつろひの花をゝしみて世をすてし山のはの花をみしかな

夏部

卯月の比ある人のもとへまかりて侍りし時郭公の歌よみ侍る

ほとゝきす　一作都多氏のもとにて侍りしに庭の郭公を

庭のおもてぬれて庭の楢の葉のしけりあふ月なき夜はをくらしてん

新樹風

花の跡しけりしまのをとなりこぬ木すゑの風にすゝしき

郭公

引明の月まちかねてほとゝきす鳴ねをあかぬ心ありけり

五月郭公

郭公いつも五月の折時をまちかねけるしらしはなくもや

名所郭公

郭公しはしなくこゑの山のはに月影をのこしけり

蚊遣火

蚊遣火の煙とともにいふせきは猶もしけりのこるはかなき

閑庭螢

人をまつ庭の草むらともしてや飛かふほたる窓をもてらす

水辺螢

堂のかたにてみなれし井のもとに水のなかれよしとする

江螢

たそかれ行や江の湊の風ふけはほたるのかけは見えける

松間夏月

なつくらき松のこのまもさしいりて月のかけのみすゝしかりける

扇をよめる

涼しやとおもひけるの扇もてなさけをかすれは風の手に

某の夜堀河の舟遊をよめる

一

中空にかゝる月影は涼しくもおもほえて月を追ひてなかれ河の川

暮の春大宮勘解由少輔のもとよりおくりける

暮る春にはいと惜しの声ひとしく戸口をさしてなほきたりけり

和歌の浦の芦もて團扇を造りて人の送り侍りけれは

よみて遣す侍る

わかの浦の芦は葉なから佐ふそその風は涼しかりけり

暮の比西方寺といへる尼寺にまうてゝ養寂の君のもとに

年を経しむかしにかはらぬ庵を見れは

見れは八重のしけりて君かすみかの昔を今にかへすなるらし

夕立

小車の牛のあゆみもおそくかへりたる月のゆふ日のかけの

夕顔

ゆふかほの花の白きはさし出て軒の端にかゝりて咲る

夕立

山の端にかゝると見えし浮雲のはれてかゝる夕立のそら

池五月雨

五月雨にふりそひにけりむかしより名にのみきゝし大澤の池

さえのほる浪の堤の水鳥は柳のかけにたつ嶋なり

冬雲

[illegible]の[illegible]風の[illegible]

[illegible]夕風[illegible]の[illegible]

郭公一声

[illegible]

夏艸

[illegible]の[illegible]の道[illegible]

[illegible]の[illegible]

夏月

有明の月[illegible]の[illegible]

早苗

[illegible]雨の[illegible]の[illegible]

秋部

秋立けふ

[illegible]荻の上風

初秋風

[illegible]の[illegible]竹の[illegible]秋の[illegible]川風

[illegible]朝気の[illegible]あさの初風

七夕

ひこほしやわきてそまん七夕の手向る糸の文もこそ有

萩露

露なから折の秋萩きるもみなはてなくちるを惜みこそすれ

荻風

音そよく折しもさなから荻のうはけの風のさひしき

萓茅岡路秋日晩といへることを

秋寒きをかへの浅茅いろかはりゆふ日すゝしき松の吹風

露ちれる岡辺の浅茅うらかれて秋の夕日そ紀松のした芝

秋雨

ゆふくれは秋しき浦の萓かくれ小萩かもとをきりくす鳴

槿

朝のまる人はえきゆやあさかほの花の匂ひもかつきえぬらむ

扇の絵に合せて讀て出給ひける

ゆふされは河辺の水の清き瀬に秋そかよひて涼しかりけり

月未出山

更科やをはすて山の高嶺よりのほる月の光をそまつ

山家月

あしひきの山の秋こそあはれなれ庭人もなき月をそかたみ

羇中月

伊勢のうみ清き渚に旅ねして小夜ふけかたの月をみる哉

月前燈

影清き月にまさしく灯も人なきまとをあはれなるらし

対月思昔

昔の都しのはるゝ影をよし野の夜乃月

月前言志

見川こよひもしきしまの道人のあかしてこの月を詠みつらん

稲妻

かりそめの旅の枕にいなつまのまなくしきゆる世こそはかなき

深夜擣衣

誰か家の女乃今一声まて宵寝して暁月さしのほる川音かな

近年打続き世の中困窮せしより秋のころなし出

らしむる世の便息もたえしくなりにけり人皆

あはれやまれ多かりし去年壬午七月廿八日の夜いさゝか

暴風ふきしかはよみつけ侍りける

舟かよふ空もなく人の涙の末のさゝ波は川のみなかなしき

名所擣衣

秋風のさそふにちれるもみぢ葉は錦なる河みなぎれ

菊をなつかしく見て

植しより花のいろいろ咲みだれ錦あやなすまがきかな

菊粧如錦

庵の入口は浅ふをひたしてみしこゝをなき菊のませかき

山本通春菊十首の歌讀し侍りしまゝに如閑

咲初しは一枝なりしをいつしかも庭のさしさく

菊久盛

さきかゝる久しきさかりの菊のうつろふ花のさかりこそなれ

菊如霜

志らしくのいろをあはれむと菊のうへにしもかとまがふ露ぞおきける

菊帯露

をく露にむすぶもいとゞ千代かけて匂ひをそふる白菊の花

籬庭菊

とふ人もなくてやみなむ垣のうちにたゞひとりさく白菊の花

菊滿庭

うへしより年をかさねて菊の花さくころは庭もせまくぞある

采庭菊

人しらぬ庭の芳地の流中の庭までも一つ花咲まあさかの志からく

菊薫枕

白妙の風の便りのそれならでまくらに近き庭の志ら菊

隣菜匂

うつろへるいろこそことに見えけれ秋まへくれ日のまに隣しぼるしらきく

秋霜

長月のあり明の月のかげなくしまがふ霜のいろぞさむけき

野月

あさぢ原野らの草の葉ごとにをく露の数まで見えて庭てる月かげ

紅葉交松

中山に陥日々にけなれば白く錦の上に紅葉よする松ぞしられける

秋の歌とてよみ侍る

志をしをと籬のすゝきの霜枯てさびしくもあるかあさぢの山里

旁

中さらし浮路のかたちすゑ中なかく嘆てしのぶこそとしもなき

題志らず

いさよひて白波のうつりぬる紀月のひかりはあやなさ海やと

雲間雁

白雲のたえまはあまきる月かけへつらなりてかりなきわたる利

虫声繁

あやなくもあきのあはれはおほかる虫の声そきこゆる縁もとめよ

八月十四日

今よひの月あくまてらしなん明日の夜の月の光ハかくもてし弥ハ

橋上霧

ともし火の白さる上に霧たちて月まちえけるかさゝきのはし

隣家擣衣

よひ毎にあはれとひゝくなるあらし隣のきぬた夜ふかく川音

此短冊真蹟、藏二在久城氏家一。

八月十三日嵯峨へまかりて帰るさに見侍る

山の端に入日のこりてたそかれのそらにうかふ新あかり中そらの月

常田氏の何某秋の比東のかたへまかりけるに別れ侍りしを霧月の

比なかりし所をとおもひ侍りける

秋のきりやこゑ一声とつまこひしかりなく鹿のこゑや残らん

月前納涼

月きよき柳のもとはゆふすゝみ人も待かねぬよすかく

音羽山ちるさはまて。

ゆく秋の風の音羽の山もとにこえしや今日ゆかむ（かえイ）

畳接重出

雑歌とて

なかくつになかいの浦のまつおもひおもへい人を命なからん刑

山家暮秋

しかしなく鹿の音のみかれくさびしくのあるあさの山里

月歎傾

くれ竹のすゑのけのなかきよすがら有明の月をながめあかし波

七夕

さらしけ詞かいひかはしもなくて秋をまちたる名のかぎりなん

暮秋

さびしさは物しのまづのふかきに月をかきに見えてなる身を

秋の歌とて

人まちて夕さびしさ庭の面に桐の葉おちるあきつのおとしる

初秋雲

秋きぬと風もいろある夕くれにみなとの雲の山路乃くもか

草花色

いろいろと花もさくくさのなかにしてあかきくれなゐ

野草花

おし草のかれぬるさへやかなしむか枯てもある一さかりとしく

九月十九日等持院の紅楓 詩のかくに

秋ならでさきしく花のいろなれやあかくそめたる楓さへ

初秋風

吹風や萩のうは葉のそよぐより秋とは袖にまつしられけれ

月前萩

萩原や浅茅しく秋風にまたなきそめし月のかけかな

月と秋久

秋ことに月はかはらぬ光なれと猶ゆくすゑもちきらさらまし

又十五夜の月隠れたるに暁はれけるを見て

まれにきてあかぬ名にのみそらにこそいつも隠れて見えつる月かな

冬部

初冬

冬来ぬとはけさみそしるおくれけり庭の木の葉のちりにけり

神無月風もはけしのちりけるは落葉の吹く小篠にてまし

初冬霜

おけはまた庭もかうなるあしたかな草葉にまさる秋の夕きり

落葉

朝なく庭の木の葉の数をかくさのみにあきはてし冬にはなりけり

庭の菊を家主のもとへ

あらしさへおく花のきてしもそかくに移花なき時の菊と見るかな

同し心を

さむくなるまゝに色ぬ松もふりて霜に枯てし庭のしら菊

寒草

折ての尾花をかる枯野の霜にかゝるもあはれなる

冬荻

冬枯の荻の音さむし世の葉にそよく小笹やそよくらん

冬月

さえわたる雲ゐを晴て暁ときえ行月のかけのさむけさ

浦千鳥

浦ちかくなる千鳥の声もさむけくて

寒松

霜のあさおきに見はらし結はれぬる松風のなく

初雪

初雪ふるの田の稲葉かりおさめて冬はきにけり

庭上初雪

ふる雪のはらふともへときゝし今朝は又の庭の松かえ

神山の小山の雪の神くらゐしるく見えけり

〃くれなゐや杉のしるしも見えぬまで春日の山はまた雪ふりけり

竹雪

〃朝ぼらけ竹のさ枝にかゝる雪の清くも落る世の中ぞうし

深夜聴雪

風さえて雪やふるらん音たかき夜の窓の村竹しなふなり

埋火

おもふこと底にこもれる埋火のそのけしきにもおもひしらるる灰の中

媽妻の喪に侍りける比池水雪にうかへるを

〃ありしにかはらぬ蓮田の池水はゆくへもしらぬ我身のつらさ

竹雪

〃ゆふ竹のもろきにたへかねし折もあらずけさの雪のしたゆく

山家落葉

さびしさはこの木の葉の散りしくをあらしの庵の山陰の庵

冬池月

月影も水に中し池水の氷ひとつ見ゆるは寒き比なりけり

山雪

中にまじるに雪の重きなるにもみつれてみよし野の山

山家霊

降ゆきに跡をもたえて埋けれ柴たく烟の雉

山家雪朝

さゆるより都の人をまつの戸もひらきもやらぬ今朝の深山の白雪

山家雪

雪ふりてけふも峯の山里はひとり住身にあはれなりけり

十月の頃正木(?)の下みちをまかりしに桜のしたかはりのもみちしてさくらとえし

まつ花あるかのみちよいろくて山ざくら花

初冬月

秋くれて木のはも散し庭の面に霜さへしろく冬の月かけ

池水半氷

山陰の池のこほりのかはらけのさはやかなるのほとりをみる

山家落葉

秋風のうへつり四方の木の葉をふきたてゝあらしにまかす山陰の庵

冬月

木の葉ちり人の音せぬ庭のおもにひかりくまなき冬の上の月

冬の夜のたかき河波さえくて氷の上にさえて身にしけ

十月のはし東山にまかり侍りし道にてよみ侍りける

一作 山人の深山のみちをかへりてはとの

山人の薪こる道もうつもれてたえたえしるき四方のあらしに

落葉

そよく葉のなこりもきえてしくれぬる落葉かうへにかゝるしら露

浦千鳥

浦ちかく千鳥なくなり夜をさむみ立ゐて楫をすへてこくらし

寒菊の歌よめる

いつしかと霜にかれゆく菊の花さかりもしらぬ色をみせける

深夜聴雪

雪をしも音にきゝて更る夜のしつけさにしも窓をうつなる

呉竹の葉の末はかり風さえて窓うつ川雪の月をまつ夜に

冬月

霜さむき袖の月影さえわたり氷にやとる床の秋風

雑部

中庸戒慎恐懼の心をよみ侍りける

我ひとりしるこの身の外に道ありとおもふ心そまよひなりけれ

貧家の歌とて人読けるときゝてよみ侍りける

文化十四年丁丑春十二日。久城氏贈仁斎先生真跡短冊一葉今とりの字以真跡校合。

うけしらへし新世のむくし思ひ出て神の香しるき庭乃さ花
あはれなる庭にそのまゝにかゝる月をとゝめし関の上そ久るしん
風さはる竹の枯葉そそのまゝに積りもひらさこゑ乃いゝ

禫祭の日服を捨しとき作りし歌

ことしさへまた衣かへしけふ（ほとイ）もの涙のあかはかはらなきとてふし衣の袖

嫡妻の喪中に山形右京門大夫宗堅（将イ）丈より歌よみてとて

さける返し
おもひしれ別れし床のきのふにもかはす明暮を雨ふる河
こゝろある人にしめさぬ絹の袂もむなしくあまりしむしをとゝめしを

同じ妻のまかりし時そえよみて送りける
人をおもふ心はなかりし思ひ出しはなみだのかゝる歌

鐘楼行方
きく南風のまゝにおくる鐘しきりかゝる鐘の声かな

海辺眺望
和田の原八重の潮路まで夕なきさわたる舟の月影そしるき

有馬の湯あみする人のまかりし小舟より読し送し歌
詠人ありしも有馬の温泉に拾る丹波の原の風ふけよ
丹波国なる人のまかりし付けしその餅をみてそへて作ける

おもはおもはいつやしとらはらす与謝乃くらくしの有明の月

小野よりおくられける時よみて侍りける

角しられぬおもひえて思ひ道に野山のけ乃庵

寄道述懐

世をすてしすぎし百の年ふるをいかにとは思はでやみしとのいつかの葉の道

閑中燈

あはれかの光をまなびさとすかきつくる文のゆかし火

天正三年四月廿二日禁中にて古今集伝受文竟宴侍り

しに寄道祝といふ事を講せられしに詠みて奉り侍りし

萬代にかはらぬ君をまもらんしきしまのうら

寄道祝

和国の人はこころを種としてことの道はすゑもにしにきえせし

小原公宗イ以老母八十八算のよしきこえて参し侍りける

いかあかり八算を経てぬる玉椿いく十代のさかへ有るしな

庭雪

さしやかてかはるゝくして庭の雪あかし月の影やうつらん

こんなう人庭の松の色はたゝ緑にわかれてもみしれる人にそふあれば

人の影の侍りけるよしくて歌よみ侍りける

あさましきたのみもたえてさけしやそや庭の木に葉も打かし　宜光

寄舟述懐

法ならで身はあさき法の力に舟こそ得からしや世をわたるまし

人の影をみてよめる

来し世をさとるよしも移しつる其面影をみるそ法けれ

齋（寂イ）輪法師のもとにまかりけるにかへりにおくられけれは

宿をそれかしこさまに光をそへてこそ月のみちは照し

くもりしその月日をくらし京都の方のゆきさの　古寺

深山夜

行なれし大山の麓にくはしく見けしく松風すこく嵐こそ聞ゆ　少敬

江州水口より京へまかりける時大津にてよみ侍りし　暁谿

甲の拾玉をききて

我のみそ起く栗津の原をとりてあはれと見し勢田の長橋

影出てくもりはなくてあはれみちや影見えて勢田の長橋

今様や和歌をよみしてあはれて見るにあはれさそ栗津の

京をとをく行きて出し今様をかしに袖の色そふ都出てし

今年も拾はる身を見て山本氏に申しつへくえ見えさせつは影うつれは

九月四日

仁齋

伊藤長胤

そこはかと草津に行かふ舟のかよひく

近江路やさゝ上の山を詠やりて名にたてる月の出るをしはし

古寺鐘

ゆくしほのたえし世やきかん初瀬山まつのあらしに入相のかね

庭前の松をよめる

松ことにめくみをうけて庭の雲かしこきさかへあらはるゝかな

寄竹雜

雜下恐有脱字。

みよしのゝよしのゝおくの呉竹の葉もともにこゝろあらしのゆふ涼し

幽居即事

覃按重出。

流れゆく新竹のかけ清きを手のうちに楠のもとにすゝしかるらん

不寐燈

ねぬるよのさえかへりけるなか灯のきえなんとしてかゝれてもなほあかしつる

雨降る夜灯をかゝけて

雨の夜のしめりかちなるともし火のあふらをそへてかゝけもやらむ

扇をよめる

扇をもてあそふ人の涼しさをさかりの暑さになほや頼まむ

四休居士か江繩安樂の詩をいひかへてよめる

ぐくるしへかうしりをあしれ我からをきしつのあたらるひとをとふらへ

老後述懐

今さらにハまた存命しらりしるあもひそをしむへしやしき

寄月述懐

世の中をうしとて一はなれても惜しからぬ身を月にいつまてん

寄石述懐

沖中の藤よ根ともなりてさはれるとしつて我身なりけり

述懐の心をよめる

我か世より古柄小世くあつしてめとうしに待く人の見るらん

寄河述懐

風吹ハ砂波まき河の瀬乃枝の乃あかれひしのくしろき

思往事

影くしきおしはちむめ我かしきの中をもる苦しきなりけり

左右は方違の母秘まりし待りしらぬ中もしける

秋さきそちるや柞の木のおもかけをさそふなしみ我をおもしかん

伊藤淳篤

身をしりしすし付我かやもしける

人のむしも人をもちけり世の中おもひてのみきさしく思ひしき

老後すまし待つかな

いつまてか老ぬる身にもやよひまてわかなの春にあひぬる

若草をよめる

故郷の小竹とも見えしけれはふるさとや淺茅の杉のまか

松

霜雪にもみさを柗かす生ひたちて人のこゝろはいかにやはさむ

斯民也三代之所以直道而行也といふこゝろを

人ことにまことしあらは月日にも何にもかはる世にもゆかめ

扇の絵に芦手の歌なとかきたるに

難波江やあしのはそよくはるかせにしほならぬかたに小舟こゝにはゝるらん

山中多暦日といふことを

山里にすむのかさなりしはしらぬまにさりてめくみを花にかそふる

住人のしらぬにやとる峯山庵のなくにをあさましれぬ

水樹多佳趣

木すゑさへ池にうつりて波に浮むしきて水草にうつるかけのあかねさす

嵯峨に家作りて住ける人の家の墓をもかはらて住けるに

折ふしにかよふ人とてなき小倉山峯の古柳のおとしさひしける

鴫

秋のくれをしき人やなかりし甲斐なき沢辺の鴫はなれにけるかな

最勝四天王院障子名所和歌四十六首

春日野

岩かねやまかはさし春日野のはるわかなの白ゆきはうりハ

芳野山

雲とみしさくらはちりて又雪のふるとはみえしよしの山

三輪山

露ゆくへもしらす杉のかけにしるしもみえし三輪の山本

龍田山

たつた山ちる紅葉のあさなさなちりそめにける峯の紅葉を

初瀬山

はつせや杉の原にも秋の雨はれまもみえす雲の立らし

難波浦

なにはえや梅の下風吹しよりうきてそよる霞のそこも白妙

住吉浜

ゆふくれは入江の松のあらしよりおしきたもとの住のえのはま

芦屋里

あしの屋のいさりたく火のほのかにもなれてすむ秋の夜の月かけ

布引滝

とこしなへにかはらぬものは峯の上より落る布引のたき

生田森

あきかぜは生田の森の下もみぢちりしや今も名残なりけり

和歌浦

ことのはの海や有明の月のかげさやけき芦辺の浦のたつしらなみ

吹上濱

秋風に吹上の浜の月かげは白妙にこそ見えわたりけり

交野

狩暮し交野乃原にやどりして淀の流れや月にすみなん

水無瀬川

ここも川菜のしたゆく水せきかへしけて白露のをちこちすむ

須磨浦

あはれなるしほやくあまのそでならぬ月にしほるゝ須广の蜑人

明石浦

波しづかあかしの浦の有明の月のかげのうつるなりけり

餝广市

まちまちにあつまる市のにぎはひは民のをさまるしるしなりけり

松浦山

あつましのはらくまさぬ月かけをね覚の山かたしきてねぬらむ

因幡山

ほとゝきす鳴やいなはの嶺におふるまつとしきかはいま帰りこむ

高砂

高砂や松も老ぬる秋風に月や昔の友となるらむ

野中清水

いにしへの野中の清水今もなほたえせぬものは心なりけりや

宇治川

水くらき宇治の川へのあしろ木に朝霧ふかき秋の山かけ

大井川

大井川よるの紅葉をさそひ来てのちのあらしのいろも

鳥羽

秋はなほふるさとの雪月夜にて稲葉の風に人なかりけり

伏見

つけよとや稲葉のそよとしらせつゝ伏見の里のあきそしらるゝ

泉川

月すみてもえこちし泉川柳のまゆもあはれなるらむ

小塩山

をくら山まつにしもあくかれし小夜ふけて月まちかね

相坂山

あふ坂やこゑの杉むらかくれ月関のこなたの花の香そする

志賀浦

春の日は志賀の里人いそしむやさゝ浪坂本よりも菜つむなり

鈴鹿山

すゝか山秋をやさしみかゝるらむ香もしくはなしくれふるなり

二見浦

ふたみ浦松のみとりのたえてなほ霞のうちにまさりけれ

大淀浦

大よとのまつのいくよをへてしかもかへる雁の道のしるへなり

鳴海浦

なるみかたしほひのまさに浜の上にいくたひかちとりのなくなり

濱名橋

東路やさかひの橋をこえくれはいかにゆくらむ秋のあけ方の旅人

宇津山

うつの山こえてをきつのしきのうちにかはらぬ人のつたの細道

更科里

行く〱や秋山こえて旅の日数へて月を友とて見しらぬ里に

富士山

時しらぬ雪は昔にかはらねとまた清く流るゝ雪のふしの山

清見寺

きよみかた有明乃月きよくして浪てらすなる浦の松

武蔵野

月かけのかきりもしらす広き野にとまる末もしらぬ野の原

白河関

月をまてるおほのいそきて故郷を遠く白川の関のあきのゆふくれの

阿武隈川

天乃代よりあふ隈川乃あふせしもありしむかしのせめて乃埋木

安達原

風寒しあたちのまゆみいろつきて秋の末の原の露

宮城野

風さむく宮城野の萩の露おもみしかや鹿の声ふかきよ

安積沼

其の花は月にあさかの沼のうへにうつりて浪そたちける

塩竈浦

はるやゑえしゆきちる散ほくまつれくあらまそのこしかを

原芸菴老兄鑑奥手をとし給ひ侍りしを

題しらず
海なつかし雖ほそし人まちあはせのかせのまにまにこころなき

海士楊立

ためしとや中なかり楊立や與謝の入江ほの明けのかや

點六十四首内誥點七首
今改五十六首傳寫八首の點を失ひさるべし

覃按六十三首點あり一首點闕

古學先生和歌集 終

予わかゝりしより稽古をなし師傳をうけしとて歌をも識て見るは
壇をも立ずさらにあしもとをしらずして花晨月夕折にふれては句の真似をば
なしてまねぶにて後出来る風光をとらへてまなびに歌の風情
をまなびて又清度其意をもて志しては定めがたきことおほ
く侍るもしあらはれし人のことばをゝしみてあらば又人にえさる
ことの葉ありぬべしそのはじめにおよぶは唯この川に於て歌に點
を加へるはひとつとなりて侍れば老後の慰さみにとしるしぬ
まさにそれあひて定め點を加へ侍りぬ古人をもとめつゝの歌
をかの自歌合に名付けりしふしに侍らはしるすべきのみ

元禄癸未のとし二月中旬

洛下老布衣　維楨題

早稲田大学図書館
011888006429